
有言実行の男

副官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有言実行の男

【Nコード】

N3137Y

【作者名】

副官

【あらすじ】

ヒカルの碁二次創作、自サイトからの転載です。

アキヒカ子とたばたラブ未満コメディ。（ヒカル♀設定となります。ご注意ください）

あかりの受難

その日、あかりは疲れていた。

夏休み前の時期、期末試験の二日目が終わわり、残すところ後一日、4科目。

高校初の成績表がかかっている。

やっと入った高校だ（しかも第一志望。）制服の可愛い女子高。家からも近い。

高校三年間を有意義に過ごすためにも、初っ端から躓くわけにはいかない。

明日の試験科目は、保健体育と生物、古典漢文、それに音楽。どれも比較的得意だ。今日の数学が一番の山だった。

とにかく疲れていた。今日は復習をざっとやって、早めに寝る予定だ。

「ただいまー」

いつもより早い時間の帰宅。……居間から朗らかな声がする。

「お、おかえりー。あかり」

居間には、トラブルと仲良しの幼馴染が、当然のごとく、いた。

「ヒ、ヒカル？」

囲碁のプロ棋士として、先だつての北斗杯ではただ一人女流として出場した。勝負には負けたものの、その力量は高く評価された。

普段はジーンズにスニーカー姿で男の子にしか見えない女流棋士、進藤ヒカル。あかりの自慢の（そして厄介な）幼馴染。

「どうしたの？ヒカル」

「なー、あかり。協力してくれよ」

にこにこ。長年の経験により、この笑みは良くないものだ知っている。

今度は一体どんな突拍子もないことをやらかすのか。

身構えたあかりに、ヒカルは爆弾を落とした。

「オレさ、塔矢を誘惑したいんだ」

カミサマ。ヒカルはいつたい何を言い出したんですか？

明日の試験科目は、大腰筋とエンドウ豆が3対1で清少納言がオ・ソレ・ミ才を独唱。

ヒカルのこのお願いは。

どうしたらいいでしょうか。

藤崎あかり。花の女子高生。

受難の始まりであった。

アキラの失着

ことの始まりは、囲碁のイベントだった。

梅雨も明け、急に暑さを感じ始めたこの時期。観光地が人であふれないうちに、という思惑から、涼しいリゾート地で行われたイベントで、ヒカルとアキラは一緒になった。この日、イベントに駆け出されたのは、若手から中堅のプロ6人。女流は、ヒカルと桜野千恵子三段の二人だけ。今回、アキラの仕事は、公開対局の対局者。ヒカルはその大盤解説の聞き手役だった。

鈴木五段とヒカルの大盤解説は大いに受けた。

「この佐藤プロの一手には、塔矢のやつ、意表を突かれましたよ」

「進藤初段は、塔矢三段と仲が良いですね。次、塔矢君はどこに来ると思います?」

「んー、ここをきりに来るか、それともこっちをハネるか。形としては、キリのほうが塔矢の好みと思うけれど。でも塔矢のやつ、これ聞いて違う手にするかも」

「進藤!」

「ほら。外野気にしてないで打てよ」

「なら黙っている！」

「今日はしゃべるのが仕事だぜ？オレ」

「あはは。本当に仲がいいですね」

こんな調子だ。

結局、アキラは気を散らしたのか、1目半差で負けた。相手の佐藤六段にしてみれば、アキラはヒカルと口論しながらだから、1目半差では不本意かもしれない。

初日のスケジュールは、何事もなく終わった。

「進藤。この後、打たないか」

夕食の席で、アキラがヒカルに声をかけた。それは充分予想していたことだったから、ヒカルは頷いた。

「桜野さんと風呂行くんだ。その後な」

「わかった」

何の事は無い、いつもの会話のはずだった。だが。ちゃちゃを入れた人物がいた。

「あら。お風呂上りに、なんて意味深ねえ？」

ヒカルとともに食事をしていた桜野女史だ。

「「え？」」

ヒカルとアキラは同時に首をかしげた。

「塔矢君？進藤君はれっきとした女の子よ？誘うにしても、もう少し気を使ってあげなきゃ」

ナニライツテイルンダコノヒトハ。

ヒカルとアキラは、同時に思った。

「桜野さん、オレと塔矢は、碁を打つだけですよ？」

ヒカルが笑って言うと、アキラも頷いた。

「そうですよ。大体、進藤ですよ？」

さらりと言われた言葉に、ヒカルは微妙に引っかかりを覚える。

桜野は、ちょっと呆れた顔をして、それから苦笑した。

「違うの。そうじゃなくて、周囲に気を使いなさいってこと。進藤君は女の子なんだから、夜遅くに男の人と一緒に居て、悪い噂になったりしたら、困るでしょう？」

ああ。そういう意味か。

二人は、言われた意味は分かった。しかし納得はしていなかった。

「オレと塔矢があ？ないない、そんなの」

ヒカルが笑って言うと、アキラも頷いた。

「ありえませんか。進藤相手に」

さらりと言われた言葉に、ヒカルは微妙にむかついた。

桜野は、盛大にため息をついた。

「…好きになさい。でも、老婆心から言うけど、打つのなら、会場かロビーかにしなさいね。進藤君、塔矢君の部屋なんて行っちゃだめよ」

イベント客に囲まれたらウザイな。

二人は同時に思った。そしてヒカルは、顔にも出た。

「こら。先輩の言う事は聞いておきなさい。何もなくても、見る人によっては違うんだから」

桜野女史は、良識のある大人だった。時々年下をからかうことも

あるが、面倒見のいい、頼れる姉貴だ。

「進藤。桜野さんの言うとおりだ。1時間後に、ロビーで」

塔矢アキラも、一般的には、礼儀正しい若者だ。ヒカルは見解を異にするだろうが。

「ん。しゃーねえな」

そんな二人から言われ、ヒカルもしぶしぶ頷いた。

そして1時間後。

ぬれた髪もそのままに、ヒカルがロビーに現れた。

黒ジャージ。首にタオルをぶら下げて。

アキラは密かにため息をつく。

…桜野さん。ホントに老婆心ですよ。この進藤を見て、いったい誰が女と思うんだ。

「進藤、髪くらいちゃんと乾かさないと、風邪をひく」

「大丈夫だって。オレ、ここ十年くらい風邪ひいたことないし」

…ナントカは風邪をひかない。ただの民間伝承じゃなかったらしい。

「…桜野さんも、気を回しすぎだよ」

アキラは、ポロリと言った。

「あー。まあ、オレのこと心配してくれたんだろうし」

ヒカルは、ガシガシと髪を拭きながら応じた。アキラも、その言葉には頷く。

「無用の心配だと思うけどね」

さらりと言われた言葉に、ヒカルは結構力チンときた。

「…お前の信用がないんじゃないの？」

俗に言う、売り言葉。

「…どういう意味だ」

アキラも、慥然とした。

「やーっぱお前もオトコだし」

だから、オオカミになる可能性もあるんじゃない？そんな髪型でも。

「なんだと？馬鹿にするな。可能性も何もない。キミ相手に」

それはそれはお見事な、買い言葉。

だが。

アキラは気付いていなかった。

失着の一手を、今まさに放ってしまったのだ。

ヒカルの意地

桜野は、随分早く戻ってきたヒカルに驚いた。てつきり、2、3局は打ってくるかと思ったのだ。だから鍵も持たせたというのに。

「なあに。やっぱり髪を乾かせないと寒かったの？」

「ちくしょー、塔矢のやつ」

戻ったヒカルは、出て行ったときの上機嫌もどこへやら、足音も猛々しく肩を怒らせている。

「喧嘩したの？まったく、仲が良いんだか、悪いんだか」

呆れる桜野に、ヒカルは向き直った。

「大体、桜野さんがあんなこと言うからだ」

なにやら矛先がずれていないか。

「あら。あんなことって？」

「塔矢の部屋に行くなんて。あんなこと言うから……」

言いかけて、ヒカルは口を噤む。桜野にあたるのは見間違いと分かっていのだろうか。

しかし。桜野女史は、良識のある大人だった。面倒見のいい、頼れる姉貴だ。

……時々年下をからかうこともあるが。

そして。『面白いこと』には滅法鼻が利いた。

だから。ヒカルの八つ当たりなどさりとかわし。

「あら。『あんなこと』を言われたから、お互いがただのライバルじゃなく、男と女だってことに気付いたのかしら？」

大人の余裕で、ヒカルを手の上で転がした。

「違うよ！あいつ全然オレのこと女だなんて思っ
てないし」

ヒカルは、そんな桜野にやすやすと転がされると気付きもせず。盤前では決してしない下手を打った。

「そうねえ。さつきも、『進藤ですよ？』とか『進藤相手に』とか、問題発言もあつたわよね」

流石、確りとポイントをおさえている。

で、今は何言われたの？

「もう、頭来た！」

ヒカルは、さっきの会話を再現してみせる。

「…ひどいわね。塔矢君って、もうちょっと良い子だと思っていたけど」

桜野は、ヒカルの怒りに同意して見せながら、内心では笑いをこらえるのに必死だった。

可愛い。なんて初々しいのだ。これはゼヒとも見守ってやらなければ。

この時、桜野の脳内では、対局中もかくやというほど猛スピードで、ある計画が練り上げられていた。

「進藤君。なら、ちょっと塔矢くんに仕返ししたくない？」

進藤君だつてれっきとした女の子なんだって、思い知らせてやるの。

桜野の提案に、ヒカルは勢い良く頷いた。

翌日のイベント会場で。

アキラは初めてヒカルの（私服の）スカート姿を見た。

桜野は、朝1時間もかけて、ヒカルを飾り立てたのだ。

桜野の手持ちの服やスカーフを上手く組み合わせで。スカート丈も、ヒカルのすんなりした脚が綺麗に見えるよう、急遽すそ上げし引き締まったウエストを強調するように太いベルトで。ちよつと寂しいバストは首に結んだスカーフで視線をそらし。普段は梳かしただけの髪も綺麗にセットした。

何より、桜野の力作は顔だ。ナチュラルに、清楚に。でもヒカルの表情が映えるよう。

「うわー。進藤君、普段お化粧しないから、尚のこと化粧栄えがするわ。お肌もきれいよねー」

我ながら上出来、と、桜野がヒカルを開放した時には、ヒカルは既に昨夜頷いてしまったことを後悔していたのだが。

「ほら、こっちの姿見で見て御覧なさい」

バスルームにある鏡をみて、ヒカルはガッツポーズを作った。

「うわ、これオレ？すごい！結構イケてんじゃない！」

後はその言葉づかいと仕草だけだ。こればかりは、桜野にはどうしようもない。

「進藤君、そのスカート、ひざ上10センチなんだから、大股に歩いちゃだめよ」

……それぐらいしか、言える事は無い。

かくしてアキラは、着飾ったヒカルと、対面したのだ。

だが塔矢アキラはどこまで行っても塔矢アキラでしかなかった。

「なんだ、進藤。その格好は」

平坦な声。これが多少なりとも動揺していたなら、ヒカルも気がすんだのだろう。

「……言う事はそれだけか」

ヒカルの声も、負けず劣らず平坦だった。平坦すぎた。

「…おはよう?」

他に何を言えと?

アキラは首をかしげる。ヒカルは爆発した。

アキラの横っ面を、張り飛ばした。

ヒカルは決意した。

こうなりや意地だ。

なにがなんでも。塔矢アキラを、オトす。

拳を握り締めるヒカルの背後で。

桜野女史が肩を震わせていた。

あかりの計画

試験の真つ只中にヒカルの強襲を受けたあかりは、事情を聞き協力を約束した上で、二日の猶予を申し出た。試験のための一日。それに計画を練るための一日。

試験が終われば、試験休みがある。その後は直ぐに夏休みだ。

休みはとことんヒカルに付き合う。

晴れて、平均をわずかに上回る成績で夏休みを迎えたあかりは、まずヒカルを連れて買い物に出掛けた。

ヒカルは、女性らしい格好をほとんどしない。持っているスカートは制服だけだった。卒業してしまった（そして進学していない）今では、スカートを穿く機会は無いに等しい。だからまずファッションから入る事にしたのだ。

そしてヒカルのパブリックイメージを、『少年っぽい』から『ボーイッシュで可愛い』に摩り替える。それが、あかりの『塔矢君にヒカルの魅力を思い知らせよう計画』第一弾。

……微妙に、ヒカルの目標とはズレている気がするが、二人とも

気付いていない。

「いい？　まずね、普段の格好をもう少しナント力するのよ」

あかりは力説する。

「ヒカルのいつもの格好じゃ、似合っているけど、女の子とは思えないわ」

ヒカルは気圧されて、頷くしかできない。

「ヒカルは脚が綺麗なんだから、ちょうど夏だし、もっと脚を出さなきゃ」

……そういうもののなのか。そういえば、桜野さんも脚を褒めてくれた。気圧されつつも、ヒカルは頷く。

「あんまりフェミニンなのだと逆に違和感があるから、ボーイッシュ路線で、でも可愛くね」

フェミニン、って何？

ヒカルはほぼ丸一日、あっちこっちと引き摺られ、試着も散々させられた。幸い、ヒカルには収入があったので、結構な量の買い物できてしまったのだ。

……女の買い物って、すげえ。

そういう感想を持つ時点で、既に計画は躓いている気もしないでもないが。

家に帰ってから大変だった。母の美津子まで加わって、ヒカルのファッションショーだ。あかりと二人、あれこれ注文をつけた拳句、やっぱり仕草をなんとかしないとねえ、とため息を吐くのだ。

明けて翌日。あかりはヒカルと出掛けた。アキラのいる暮会所だ。本日のヒカルは。

オレンジのＴシャツに白の短パン（他に呼び方があるのだが、ヒカルは覚えていない）、黒いサスペンダーをアクセントに、足元はハイカットのスニーカーだった。髪も丁寧に梳き、眉を整えて色つきリップを塗った。

はっきり言って、コノ程度のおしゃれは小学生でもする。

あまり代わり映えしないかと思いきや。

脚を見せただけで印象は全く違う。

どこからどう見ても、ボーイッシュな女の子だった。

しかも、あかりと二人で駅前を歩いていたらナンパされたのである。

ヒカルはナンパ初体験であった。

「うわー、びっくりだ」

「ヒカル、ちゃんと女の子してるよ。自信持って大丈夫」

目をぱちくりさせるヒカルに、あかりは笑った。

「でも、コノ格好、ズボン以外は普段とあんま変わんないぜ」

「だからいいの。いきなり全然違う格好したら、塔矢くんだって何事かと思うじゃない。ちよっとだけ違うなら、受け入れやすいと思うけど」

あかりは、イベントでの顛末を、そう思っていた。急に普段と全く違う姿を見せられれば、誰だって面食らうだろう。仮装と同じだから失敗したのだ。

桜野がこれを聞けば、憤慨するに違いない。私にはもっと深い思惑あつてのことよ、と。

「こんちわー」

囲碁サロンに入ると、空調の効いた空気が心地よい。

「あら、進藤君、いらっしやい。お友達もいっしょ？珍しいわね」

受付の市河が愛想良く迎えてくれる。いつ来ても笑っているのは流石だ。

「あ、こんにちは」

ぴよこん、とあかりは頭を下げた。それを見て市河も微笑む。

「あら、可愛いー。どうしたの？今日は」

「どうもこうも。塔矢、いる？」

カウンター越しに、席を立て近づいてくるアキラを確認し、ヒカルとあかりは密かに戦闘態勢に入った。

「あ、塔矢。打とうぜ」

アキラを見つけたヒカルは、いつものように、挨拶も抜きでこう言った。

「ああ。だが、彼女は…？」

アキラが、あかりに目をやる。

「あ。幼馴染の、あかり。前会ったことあるだろ、学校とか、囲碁大会で」

「こんにちは」

あかりも、にっこりと挨拶した。忘れられているだろうことは予測済みだ。

「こんにちは。でも、せっかく一緒に来たなら…」

放っておくわけには。そう続けようとしたアキラは、しかし、言

葉半ばで、絶句した。近づいてきたヒカルの、カウンターの陰になつていた下半身が見えたのだ。

いつもならジーンズのはずの、生脚が。

「いや、今日はこいつ、打つとこ見たいっていつからさ。気にしないでくれよ」

そんなアキラの様子に、ヒカルとあかりは心の中でガッツポーズをつくった。

和谷の入知恵

「へえー、それで塔矢のやつ、どうしたんだ？」

いつもの、棋院近くのファストフード店で、ヒカルと和谷、伊角が昼食をとっていた。

今日の話題は、ヒカルの一方的な愚痴である。

「塔矢のやつ、オレの足見て、最初はメツチャ動揺していたんだぜ！なのに、対局はじめたとたん、盤面しか見えてねえの！」

あげく、大敗を記したのだ。ヒカルは思い出しては改めて腹を立てている。

「……恐るべし、囲碁馬鹿……」

和谷が笑いをこらえながら、感想を述べた。伊角も、苦笑している。

と、ぷりぷり怒っていたヒカルが、急にテーブルに額をぶつけた。

「……なあ、オレって、そんなに女として間違ってる？」

そんな様子は、可愛らしい部類に十分入るものだったが。

「進藤。そんなに落ち込む事はないよ。ちょっと相手が悪いだけさ」
伊角の気休めに、和谷も便乗した。

「そうそう。塔矢って、ちょっと結構かなりズレてるもんな」

大体あのファッションセンスは謎だよなー、などと笑っている和谷を尻目に、ヒカルはため息をついた。

実は、それなりに自信があつたのだ。あかりも褒めてくれたし、ナンパもされた。自分で鏡を見ても、割といい線いくんじゃないかと思つた。

それなのに。

「……はあー。ちくしょう。どうしたらいいんだよ……」

その気弱げな様子に、馬鹿笑いしていた和谷も、居住まいを正した。

「おい、ホントに塔矢のやつを、どうにかしたいのか？」

「したい。だって、あいつ、マジ腹立つんだもん……」

ぐりぐり、テーブルに額を転がしたまま、ヒカルが答えた。

「……うーん。その理由はイマイチ解からんが、お前が本気なら、協

力するぜ？」

「おい、和谷」

小声で、良識のある伊角が止めたが、二人とも聞いちゃ居なかった。

「マジ？なんか良い考えでもあるの？」

ぱつと、さっきまでの泣き言はどこへやら、ヒカルが文字通り目を輝かせる。

「おうともさ。いいか？先ずな……………」

二人が密談するのを、伊角は半分諦めた顔で眺めていた。

……二人とも。進藤の目的は、塔矢アキラに手を出させる、んだぞ？それが具体的にどういうことが、理解できているのか？

特に進藤、なんで自分がそんなにムキになっているのか、自覚は？

「そっかー、ありがとう、和谷。参考になったよ。早速試してみる！」

言うなり、ヒカルは残っていたジュースを飲み干し、店を飛び出していった。白い短パンから伸びるすんなりとしたナマ脚もまぶしく、駆けて行く。

「…………和谷。いったい何を入知恵したんだ？」

あつけに取られて見送った伊角が、同じように取り残された和谷に尋ねた。

和谷は、決まり悪げに頭を振った。

「いやー、その。ギャルゲーの基本というか……、冗談のつもりだったんだけどなー」

あははー、と白々しく笑う和谷を横目に、伊角はため息をつく。

「ギャルゲー……。あのプレイヤーの男が、都合よく女の子の危機を救ったり、都合よく無くした物を見つけたり、都合よく悩んでいるところをアドバイスしたり、都合よく出先でばったり会ってデートしたりする、あれか？」

……………その、アレ、である。

飛び出したヒカルは、ある人物に一直線に向かっていった。

棋院の廊下で目的の人物を発見したヒカルは、挨拶もすつ飛ばし、またしても問題行動に出た。

「あ、緒方先生！お願いがあるんだけど。オレんこと、弄んで！」

緒方の介入

伊角の懸念どおりの行動に出たヒカルは、ひとまず緒方に事情聴取されていた。

「……だから、悪い男にひっかけられなきゃなんないんだ」

緒方はあらん限りの罵倒を心中で叫んだ。額のスジは消せなかったが。

こんな馬鹿にギャルゲーだのを教えたのはどのどいつだ。

この馬鹿は俺のことを悪い男代表と思っているのか。

こんな馬鹿を放置している弟子は許せんな。

っつーかそいつも馬鹿？

いやそもそもこいつを面白がって焚きつけたのは桜野か。

しかしこいつもそれなりに可愛らしい一面もあったのか。

だが方向性が間違ってるな。

このまま暴走したら一体どこに行き着くのだろう？

……………面白いじゃないか。

一瞬でその結論に行き着いた緒方は。

「……話はわかった。じゃあ俺の役どころは、アキラくんの前で、お前をナンパすればいいのか？」

ふう、と、煙とともに吐き出された言葉に、ヒカルはぱっと笑顔になる。

「協力してくれるの？」

「弟子がそんな朴念仁だったとは、兄弟子としても多少責任があるしな」

いや、確かに責任はあるだろうが、それは180°違う意味での責任だ。むしろ反面教師としての面目躍如である。

「やった！ありがとう！緒方先生」

満面の笑みで礼を言うヒカルに、緒方は腹の黒さを見事に覆い隠した笑みで応えた。

「じゃあ、計画を練ろうか」

この馬鹿のことだ。ただアキラの目の前で緒方の誘いに乗れば良い、程度に考えているんだろう。だが。

「計画？」

案の定、ヒカルは首を傾げた。

「ああ。うまいことアキラくんの危機感を煽らなければ意味がないからな」

……それだけでは面白くない。

緒方はことさらゆっくり煙草をくわえて、緩みそうになる頬の筋肉を引き締めた。

その日、アキラは簡単な取材があり、棋院にいた。実はこの日の取材はもとも緒方の仕事だったのだが、緒方が急遽アキラに振ったのだ。

「いやー、塔矢三段にはご迷惑をおかけしました。おかげさまで記事は間に合いそうです」

塔矢行洋の棋譜に関するあれやこれを手早くまとめ、編集者の一人が頭を下げた。

「いいえ。もとはといえば、緒方さんが悪いのでしょうか。昨日になって急用だなど」と

アキラは一日オフの予定だったのだ。中国から取り寄せた棋譜をじっくり検討するつもりだったというのに。

流石に目の前の編集者は、緒方十段に遠慮があるようだ。弟弟子の発言に曖昧な笑みを返した。

「こんにちは」

と、事務局に明るい声が響いた。

「すみません、こないだ言ってた日程表、受取にきましたー」

聞き覚えのある声に振り向いたが、アキラは目的の人物を見つけられなかった。

「え？あの……、もしかして……」

若い女性事務員も戸惑っている。

「だから、夏のセミナーの日程。オレのスケジュール」

カウンターを軽く叩いて催促する、華やかだが品のあるパーティードレスの女性。

聞き覚えのある声と口調。だがその様子は到底普段の彼女とは程遠いもので。

「…ひよつとして、進藤プロ？」

事務員が確認してしまうのも無理は無い。

この時事務局に居合わせた男性の97%が、超美人の一步手前、と評価したその彼女は。

このままセレブ系ファッション雑誌の表紙になっても可笑しくない。

「いまちよつと急いでるんだよ、緒方先生待たせてるんだ。早くして欲しいんだ」

がたがたと、事務員は椅子を蹴飛ばし、書類ケースの棚に向かう。目の前の現実から、とりあえず逃げることにしたようだ。

「進藤？ いったいどうしたんだ？」

帰り支度にはいつていたアキラが、その隙に介入した。

「あ、あ？ 塔矢？ あれ、え、お前なんでいんの？」

挙動不審の四文字を体現して、ヒカルは聞き返した。

「緒方さんの代理で取材だ。それより、いま緒方さんを待たせているとか言わなかったか？」

こつこつ、アキラの革靴の音が、やけに大きく聞こえるヒカルであった。

「あ、うん。そ、そうなんだ。だから、ワリ、時間ない。もらってくね、サンキュ」

ちょうど事務員がスケジュール表を持ってきたのを幸いと、ヒカルはそれを引っ手繰り、瞬く間に出て行った。

台風一過、というか、呆然とした面々が残された。

「……あのー。今の、本当に進藤プロだったんでしょうか」

書類を差し出す手のまま、固まった女子事務員が、半開きのドアの方を向いたまま、呟いた。

アキラはひとまず先ほどまで取材を受けていた編集者の元に戻った。微妙に顔が怖い。

「緒方さんの急用とは、一体何だったんですか」

一方、棋院の正面玄関の前に堂々と止まった真つ赤なRX-7の前で。

二本目の煙草を取り出そうとしていた緒方に、ヒカルは駆け寄り、食って掛かった。はきなれないヒールもこの時ばかりは気にならなかった。

「緒方さん！なんで塔矢がいるんだよ」

緒方の立てた計画は。

先ず今日のスポンサーがらみのパーティーに二人そろって行く。当然緒方のツレは話題になるだろう。その噂がアキラに届いた頃、二人連れ立っているところを目撃させる。

……と、ヒカルは聞かされていた。

「棋院関係者にその格好を見せておかないと、噂に信憑性がなくなるだろう」

「それは聞いた。だからオレもわざわざ雑用作ったんじゃない。でも何で塔矢まで居るんだよ」

「それは、俺が今日一日、お前をなんとか見られる様にするため走り回ったからだな。簡単な取材が一つ入っていたんだが、キャンセルした」

塔矢行洋がらみの取材なら代打の人選はおのずと決まっている。

「……走り回った、ってさー……」

ヒカルは、朝からのハードスケジュールを思い起こす。

エステに始まり、美容院、ブティック、合間に緒方によるマナー講座。ヒカルは体力を消耗したが、緒方が消耗したのは財布の中身だけだ。

「この俺がエスコートするからには、みっともない女なんぞ許さん」

とはいえ、緒方もヒカルがここまで化けるとは思っていなかった。エステでも美容院でもブティックでも、お世辞でなく絶賛された。名の通った一流店ばかりだが、連れて行った甲斐はあったと言える。

ヒカルは、今自分が着ているパーティドレスの値段もわかっていない。おそらく桁を一つ二つ勘違いしているだろう。緒方が今日一日で幾ら散財したのかを聞けば、震え上がるに違いない。

「さつさと乗れ。くだらんパーティーだが、遅刻してもうるさいからな」

こうしてRX-7は走り出した。

棋院のロビーで、一時停止が解除されたように、人々が動き出した。

パーティー会場は、既に招待客が集まり始めていた。

緒方がヒカルを連れていくと、一部、やけに鋭い目をする女性たちがいち。

受付で、緒方がヒカルのことを、俺の連れだ、と言うと、周囲からどよめきが起こった。

「……………緒方せんせい、ひょっとしてオレのこと、弾除けにした？」

ウェルカムドリンクを飲みながら、顔だけはにこやかにヒカルが言うと、緒方は当然、と答えた。

「お前の、塔矢アキラ陥落計画に協力してやるんだ、それぐらいしても、罰は当たらん」

正確には、弾除け、兼、暇つぶし、だ。

「卑怯だよなー。やつは悪い男代表じゃん」

「お前がこの程度の視線にうるたえるタマか。オレの連れということで、羨望の眼差しだと思っておけ」

シヨッテルよー、とヒカルは笑ったが、羨望の眼差しを受けているのは、緒方も同様だった。会場の若い男性の目を奪っているヒカルに、その自覚はない。

結局どちらも図太いと言える。

立食式のパーティーが始まり、お定まりのお偉方の挨拶の間中、二人はにこやかな顔のまま、目隠し碁を打っていた。

傍からは、大層仲のよい二人に見えただろう。

実は、緒方はこのパーティーの主催者側が苦手だった。お偉方の一人に、ちょうど年頃の娘がいるのだ。以前からそれとなく話をしたがつていたのだが、緒方は逃げ回っていた。今回、断れない筋から招待されてしまい、どうしたものかと思っていたのだ。

このヒカル暴走は、緒方にとっては渡りに船だった。そのためなら、今日の出費などどうということは無い。

「おい、進藤。大口開けて食うなよ。化粧がはげても、お前、直せないだろう?」

「……………」

ヒカルはテーブルに並べられた大皿を恨めしげに睨んだ。実際、口紅一つ直せないのだから、仕方ない。

「だって、腹減ってるんだよ……………」

「終わったら、気取らない店に連れて行ってやる。だから我慢しろ」

緒方は、この弾除けが予想以上に効果があったので、上機嫌だった。なにしろ、退屈なパーティーが一転して、うるさい秋波もカットし、くだらない世間話にも煩わされず、尚且つ、目隠し暮が打てる。しかも、ヒカルとの対局は、意外性があつて面白い。

「メシのうまいところ? 緒方せんせい、酒ばっかじゃん」

「そうですね、緒方さん。そんな店に進藤を連れて行って、一体どうするつもりなんです?」

「「!?!?」」

その声に、ヒカルも緒方も、驚いた。

振り返ると、アキラがいた。……にこやかに、殺気立って。

桜野の思惑

さて。ここでアキラの事情にも触れておこう。

セミナーで、ヒカルの平手を食らった直後に遡る。

「ああーら。思いっきりいったわねー」

アキラの背後から、桜野の声がした。心なしか笑っているように聞こえる。

「……おはようございます、桜野さん」

年長者に対する礼儀だけで、アキラは言った。

「はい、おはよう。あのね、塔矢君。あとで進藤くんに謝っておいたほうがいいわよ」

殴られたのはボクなのに、どうしてボクが謝るんだ。

そう思ったが、賢明にもアキラは黙っていた。

「進藤くんも、カワイーとこあるわよね。好きな人のために可愛く
なりたいだなんて」

さらに、と爆弾を落とされても、アキラは黙っていた。『進藤ヒ
カル』と『好きな人』と『可愛い』が結びつかなかったためだが。

「あら？塔矢くんは、進藤くんの好きな人に興味ない？」

からかわれている、と思ったアキラは（実際、からかわれている）
、話を切り上げにかかった。

「進藤が誰を好きでも、ボクには関係ありません」

だが、桜野は食い下がった。

「あら、関係あるわよ。塔矢門下ですもの。進藤くんに協力してあ
げようとか、思わないの？」

……塔矢門下だって？

「ああ、でも、進藤くんがデートで忙しくなっちゃったら、今まで
どおりに打てなくなっちゃうか」

……なんだって？ボクとの対局よりも優先される人物が？

「んー、今までどおりに打ちたかったら、やっぱり無理かな」

でも、進藤くんなら押せ押せで自力でどうにかするかも。

思わせぶりな桜野の話は続く。

「でも、相手も忙しそうだし……、大丈夫とは思っけど」

だから、ちょっと協力してみない？

桜野は、何が何でもアキラにうんと言わせたいらしい。

「桜野さん、ことは進藤のプライベートでしょう？ボクがどうこうすることではありません」

きっぱり言うアキラに、桜野は肩をすくめた。

「残念ね。…ひょっとして、塔矢君、進藤くんのこと、好きだった？」

なら、悪いこと言っちゃったわ。

そんな全く悪いと思っていない顔で言われても。

「そんなこと、考えたこともありません」

アキラの機嫌は下降の一途を辿っている。が、桜野は気にしない。

「進藤くんって、客観的に見ても、いいセンいくと思っけど。暮ばっかりっていうのも、もったいないじゃない」

じゃあね、と捨て台詞を残して、桜野は去った。

ぼつねんと残されたアキラは。

今の会話を検討していた。

きつ。進藤ヒカルに好きな人がいる。

式つ。その好きな人は塔矢門下らしい。

参つ。進藤はその『好きな人』のために可愛くなろうとしている。

……そして一番重要なこと。その『好きな人』とうまく恋人同士になった場合、アキラとの対局が後回しにされる。

ことの重要性に、今更ながら気付いたアキラだった。

無意識であろう。最重要視されるべき事は、スルーされた。

桜野の落とした最大の爆弾は、不発のまま、記憶の奥底に沈んだ。

その不発弾が存在を主張し始めたのは、夏休みも始まったばかりのある日。

碁会所に現れた進藤は、少し普段と違った。

幼馴染だという女の子と一緒に現れた進藤をカウンター越しに見つけ、早速対局、と思ったのだが。

なんだか、髪はいつにも増してキラキラしている。唇も、濡れた

ように光っていた。上気したように赤みの差す頬も心なしか艶めいて見える。

つまり、女の子らしく見えるのだ。進藤が。

友達と一緒にいるせいか、とも思ったが。

声をかけて近づいていくと、カウンターに隠れていた下半身が目に入った。

真っ白なハーフパンツ。すんなりと健康的な脚。

塔矢アキラは固まった。

アキラがヒカルの脚を見るのは、何も初めてでは無い。

小学生の時はダボダボのハーフパンツ姿を見ているし、中学生の時だって、制服姿を見ている。ただ、そのときは最優先事項が碁で、それ以外は認識されていなかったのだ。

だから、アキラにとってヒカルの生脚は初めて遭遇するのである。

結構、いや、かなりの衝撃だった。

幸い、対局してしまえば盤面に集中できたので、気持ちは立て直せたのだが。

ともあれ、進藤ヒカルの性別を初めて意識したのは、この時だった。

その後、妙な胸騒ぎを何度も覚えたのだが、全て気のせいで処理された。

桜野の意味ありげな視線も、伊角の同情的な眼差しも、緒方のからかうような表情も、全てシャットダウンしたというのに。

はじめは夢だった。

ヒカルに対局をすっぱかされる夢。

夢は現実の不安となる。かれこれ一週間、ヒカルと対局していない。

まさか、進藤はもう『好きな人』とやらとうまくいつてしまったのか。

アキラの脳内では、ヒカルが誰ぞと連れ立って去ってゆく映像がリアルに構築されている。

だからもうボクと対局する時間もない、とか。

『あ、わりい。その日は駄目なんだ。その次も、次の次も。ずーつと予定でイッパイ』

進藤の声が聞こえる。

幻聴だ。……重症である。

アキラは、見事桜野の術に嵌まった。

だが。

アキラの思考は、桜野の予想を、ある意味超えていた。

あかりの受難再び

夏休みも残り少ない日。

そろそろ溜まっている宿題も何とかしなければ。

……とりあえず、明日久美子と図書館でも行つて……。

不意に玄関チャイムが聞こえた。

この非常識な鳴らし方。客が訪れるには遅い時間。……心当たりは一人しか居ない。

「なー、あかりー。どーしよー!？」

玄関ドアを開けた途端、しゃがみこんでいるヒカルが居た。

「……………ヒカル。そんなところに座られたら、ドア、開けられないから」

お前はカエルか、ヤンキーか。人様の家の玄関先で。ンコ座りは止せ。

ひとまずあかりの部屋に移動した。グラスとペットボトルを持って。事情徴収の構えだ。

「で、今日はどうしたのよ」

緒方さんとやらとパーティーに行ったのではなかったか。まさかそのパーティーでとんでもない失態を？

「あのな。パーティーはいいんだ。普通に行って帰ってきたけど。塔矢も一緒だったんだ」

ヒカルの格好は普段どおりのジーンズだが、顔はまだ落ちていない化粧が残っている。

やっぱりヒカル素材はいいのよねー。

あかりが関係ないところで感心していた。

「なんで塔矢君が一緒なの？一緒に行ったの？」

「んーんー。後から来たんだ。あいつも招待されてたんだって」

じゃあ鉢合わせじゃない。

「んでその場は緒方先生が当り障りなく収めてくれたんだけど」

いや。実は全然収まってない。緒方の一睨みに周囲が口を噤んだ

だけだ。

「帰る車の中で、塔矢の奴がさー」

訳わかんないこと言い出してさー。

緒方とアキラは、目を白黒させているヒカルもそっちのけで、陰険漫才を繰り広げていた。

塔矢門下の強さの秘訣はここにあるのか、とヒカルは錯覚したが、外野の人々はそうは思わなかった。

あの、緒方十段と、あの、塔矢アキラが、あの、進藤ヒカルを争っている。

パーティー会場に居た98.5%はそう思った。ちなみに残りの1.5%が緒方とアキラとヒカルだ。

「……緒方せんせー。さっきから周囲の視線が痛いんだけど……」

図太いヒカルも、さすがに会場の異様な空気に気づいた。

周囲を見回すと、あからさまに顔を背けるのが半分、横目でちらちら様子を窺っているのが半分。

緒方は一つ舌打ちし、勝負師の眼光でもって周囲を黙らせた。

「おい、行くぞ」

緒方はぞんざいに顎でしゃくって、ヒカルとアキラを連れ出した。

「え？いいの？まだ途中だよ……」

気遣うそぶりを見せながらもヒカルの視線は大皿料理に注がれている。図太すぎるのも考えものだ。

「顔を出して、通り一遍の挨拶も済んだ。義理は果たした」

肩で風を切って歩く緒方を止めるものは誰も居ない。アキラも当然とばかりに出口に向かっている。

一直線に歩く二人に、ヒカルは小走りについていかなければならなかった。皆が二人に道を譲るのだ。気のせいかな、テーブルまでもが二人が近づくと道を譲るように見える。

結果、至短時間で会場を後にした三人は、緒方の操るRX-7で、重苦しい沈黙に晒されることになった。

……その沈黙を破ったのは、アキラである。

「……………緒方さん。ロリコンとは知りませんでした」

RX-7が左右に振れた。ヒカルは慌てて腕を突っ張ってバランスを取った。

「アキラくん。心外だな。どうして俺がロリコンなんだ」

「ボクが言わなくても、明日棋院に行けば、そうなってますよ」

「……………」

後部座席に押し込められたヒカルには二人の表情は見えない。しかし車内の冷えた空気はビシバシ感じる。

「大体進藤といくつ離れていると思っっているんです？今度こそ犯罪かと、棋院では大騒ぎです」

「待て。俺と進藤はなんでもないぞ」

「そつだよ！塔矢、お前勘違いしてるって！！」

「じゃあ何故今日二人でパーティーに？」

「緒方せんせい、弾除けが欲しかったただだよ！」

当初の予定も計画もすっぽり頭から抜け落ちているヒカルは、必死に弁明した。

「何故キミがその弾除けになるんだ。緒方さんなら心当たりの女性の一人や二人、いるだろう」

「偶々！オレがちょっとパーティーとか行ってみたかったから！」

「いいか、進藤」

アキラが後部座席を振り返った。その鋭い眼差しに、狭い後部座席で縮こまっていたヒカルは更に身を竦める。

「キミは碁打ちだ。そしてボクのライバルだ。そうだな！」

強い口調で同意を求められ、ヒカルはがくと頷いた。

「キミがプライベートでなにをしようが誰と付き合いおうが構わない」

……じゃあ、今日パーティーに乗り込んできたのは何で？

「キミはボクのライバルだ。なら、ボクとの対局をなにより最優先しろ」

……………???

「そもそも神の一手を極めようとするなら、余所見をしている暇など無いはずだ。浮ついたパーティーなどに興味を持つ暇があったら一局でも多くボクと打て」

ここで緒方に視線を移し。

「その上で、キミが誰かと付き合うなら、ボクは何も言わない」

ここまで堂々と言って置いて、何も言わないとは。

不意に緒方が噴出した。いつものシニカルな笑いではない。豪快に、ぎゃっはっは、と笑っている。

「……緒方さん。その笑い方、品が悪いですよ」

「……つくつく。いや、失礼、アキラくん。いやいや、良く分かった。だが、俺は本当に進藤とはなんでもない。俺がそもそもこんなガキ

に手を出すと思ってるのか？」

「……いいえ。そもそもマザコンの緒方さんが、年下に興味を持つとも思いませんが」

RX-7が左右に大きく振れた。後部座席のヒカルはモロにアオリを食らって窓に頭をぶつけていた。

「……とにかく。俺と進藤はなんでもない。アキラくんが心配するようなことは全く無い」

「……そうですか」

「誰もアキラくんの大切な『ライバル』を盗ったりしないさ」

ヒカルには、アキラの機嫌が急降下したのが分かった。理由はわからなかったが。

かくして、最寄の駅に降ろしてもらった後、自宅で着替えると、ヒカルはあかりの元に直行したのだ。オーバーフローした脳みそのまま。

ひたすら要領を得ないヒカルの話を辛抱強く聞いて。事の一部始終を理解したあかりは、ひたすら徒労感と戦っていた。

……… なんか、犬も食わないってゆーか。

微妙に、緒方に同情してみたりして。

「…………ヒカル。今度、塔矢くんに会ったら、『ライバル』という言葉の定義、聞いてみたら？」

「えー？ライバルって、そりゃオレんことだろ」

なぜかそこでヒカルは胸を張った。あかりが聞きたいのはそういうことではない。

ふと、あかりは不安になった。

「ねえ？……確認したいんだけど」

微妙に、いやな予感がする。というか、基本的なところをすっ飛ばしていたことに気づいた。

「ヒカルは塔矢君のこと、どう思ってるの？」

好きなのよね？誘惑したいんだ、なんて爆弾発言かましておいて、まさかまさか……………？？？

「塔矢はオレのライバル。当たり前じゃん」

ヒカルは更に胸を張った。えっへん、と咳払いが聞こえそうな気までする。

「ライバルはいいけど、それ以前に、塔矢君のこと好きなのよね！

「？」

あかりはもうヒカルの胸倉を掴んでいる。YESと言え、と眼差しで訴えていた。

「うん。そりゃ好きだよ」

あっさりと頷かれ、全身で安堵した。だって、まさかまさか。塔矢アキラだけでも難題なのに進藤ヒカルまで無自覚だったりしたら救われない。

「そうよねー」

「何言つてんだよ。嫌いな奴とつるむかよ」

安堵した直後にまた微妙な発言だ。

「……………ねえ。ヒカル？ちなみに私のことは…………？」

「ええ？好きに決まってるじゃん」

「筒井先輩は？」

「うん。好き」

「斜向かいの菅さん家のニヤン太は？」

「好きー」

「……………らーめんは？」

「大好き！」

神様。ちょっとこのニブチン、サクツと埋めちゃってもいいですか？

「……ねえ。ヒカル。最初、塔矢君のことオトス！って言ってたの、ヒカルよね……？」

正確には『誘惑したい』だったが。

「あ、ああ。そういえばそうだった！」

ヒカルはポンと手を打った。

「最初、塔矢君が全ッ然ヒカルを女の子扱いしてくれなくて、頭に來たからヒカルの魅力を思い知らせよう、っていろいろやったのよね！？」

あかりは微妙に涙声だ。

「うん。そうだったそうだった」

いやー、今日のゴタゴタですっかり忘れてたよ。

あっけらかんと言うヒカルに、あかりは一瞬殺意を覚えた。

「おしゃれた格好、塔矢君に褒めて欲しかったのよね！？」

服屋の店員が褒めてもあかりが褒めてもナンパされても、他の誰が褒めても満足できずに。

あかりの剣幕に、ヒカルはただ頷くだけである。

「あー、うん。そうなる、かな？」

かな？じゃねえだろう！！！！

あかりは、必死に自分に言い聞かせた。

耐える。ヒカルがこんなのは何も今に始まったことじゃない。

思い起こせば幼稚園のころからあんなことやこんなことやそんなことの数々があつたではないか。今回は油断した自分が悪いのだ。

『誘惑したい』なんてショッキングな言葉に惑わされて対ヒカルマニユアルをすっ飛ばしたのが最大の敗因。

ヒカルは悪気の欠片もない。だから始末が悪いのだが、とにかくヒカルは悪くない。

……じゃあ悪いのは？

事の発端は。……塔矢アキラじゃないか。

あかりは思った。

ちよつとくらい、塔矢君にやつあたりしても、バチは当たらない
よね？

このささやかな八つ当たりが結構な被害をもたらすのだが、この
時のあかりには、知ったことではなかった。

アキラの受難

あるさわやかな朝。

棋院では大変珍しい光景が目撃された。

塔矢アキラが、棋院の廊下を全力疾走していたのだ。良く見れば、向かう先には同じく全力疾走する進藤ヒカルがいた。

遅刻寸前で駆け込むヒカルの姿は頻繁に目撃されているし、日頃から落ち着きの無いヒカルの全力疾走などは、意外でもなんでもないのだが。それが塔矢アキラとなると、目撃者は一先ず自分の目を疑う。目を凝らし、特徴的な髪型を確認し、やはりあれは塔矢アキラだと認めた。

鬼気迫る表情でヒカルを追いかけるアキラは、まるで獲物をさだめた肉食獣のようだったと、目撃者の一人は後に語った。

疾走する二人は高速で移動していたため、一部始終を目撃した人物は残念ながないのだが、棋院内には常に人目があった。その目撃談を総合すると、こういうことらしい。

朝、塔矢アキラは棋院の玄関脇に突っ立っていた。

進藤ヒカルが、のんびりと棋院にやってくると、塔矢アキラが進藤ヒカルに近づいて、声を掛けようとした。

だが、塔矢アキラの姿を認めた進藤ヒカルは駆け出し、塔矢アキラがそれを追いかけた。

追いかける間に、塔矢アキラは「何故逃げる！？」だの「どうして僕を避けるんだ？」だのと進藤ヒカルに叫んでいた。

棋院内を上へ下へ駆けずり回った挙句、再びロビーで、ようやく塔矢アキラが進藤ヒカルの腕を取った。

すると、腕を捕まれた進藤ヒカルは、半分泣き顔で、「触るな、近寄んな、この変態！」と叫び、塔矢アキラに平手をお見舞いし腕を振り払って逃げ、ロビーには頬にくつきり手形をつけ呆然とたたずむ塔矢アキラが残された。

以上のような事実から、人々はさまざまな憶測をする。

塔矢アキラと進藤ヒカルの人となりを全く知らない第三者なら、男が女を追いかけて平手を食らったなど、単なる痴話ゲンカとしか見ない。こういう場合ことの是非はともかくまず男が誤るもんだ、などとしたり顔で頷いたりしていればいい。

しかし、棋院内には先行する噂があったのだ。

緒方精二、塔矢アキラ、進藤ヒカルの三角関係。

半信半疑どころか、愉快的デマとしか受け取られなかったこの噂は、しかしその愉快さ故にかなり広まっていた。一笑のもとに切つて捨てたはずのこの噂を、皆が思い出したのだ。

やっぱり、火のない所には煙はたたないもんだし。

へえー。あの塔矢アキラがねえ。

いや、あの進藤ヒカルが、恋愛沙汰つても意外だよ。

緒方くんも、もういい大人のくせに、なにをやってるんだ。

などなど。皆自分勝手に納得してしまったのだ。

そして人々は好奇心もあらわにこの真相を知りたがり、推測する。

不幸にして、噂というものは、その張本人には最後に届くものだ。

棋院での追いかけてからちょうど一週間後。塔矢家では塔矢門下の研究会が行われていた。塔矢行洋不在間、緒方が取り仕切っているが、不定期になりがちで、この日も、前日の予定が急遽延期されたのだ。いつものメンバーのうち数名が欠席、今いるのは緒方とアキラと、もう2名だけである。

そこに、予定より一時間ほど遅れて、芦原が駆け込んできた。

緒方が遅刻に対する文句を言うより早く、芦原は叫んだ。

「アキラ、進藤さんに謝らないと！」

これに驚いたのは、当然アキラだ。

「芦原さん？どうしてボクが進藤に謝るんです？」

首を傾げるアキラに、芦原は顔を険しくして詰め寄った。

「ああ！ もうー！！ いいから土下座してでも許してもらうんだ！
だいたい、緒方さんがアキラに変なこと言ったんでしょー！？ 緒
方さんも一緒に謝ったほうがいいかも……」

この言葉には、緒方も顔をしかめた。

「おい、芦原。一体どうしたって言うんだ？ 進藤がどうかしたの
か」

「そうですよ、芦原さん。ボクが何かしましたか？」

「何かしたって……」

ここに至って、芦原は二人に全く話が通じていないことに気づい
た。

ともかく座れ、と緒方に促され、ここに来る直前に何があったか

を説明しだした。

「……ええと。実はさっき、冴木くん呼び出されて、重大な話があるから、と。それで、行って見たら、冴木くんだけじゃなく、森下門下の白川先生や和谷くんなんかもいたんですが……」

数刻前に遡る。

芦原は、同期の冴木にいきなり呼び出された。大事な、非常に重大かつ秘密の相談がある、と言われ、連れて行かれたその先は、実は白川のマンションだった。部屋の主に似てよく片付いたワンルームには、伊角や和谷もいた。何故か、桜野もいた。皆そろって沈鬱な顔をしている。背を向けてお茶を用意している白川は、話に加わるつもりはないようだった。

「最近、棋院で爆発的に広がっている噂を知っているか」

まず冴木が口を開いた。

芦原は、顔も広いし愛嬌もある。噂の類は進んで集めなくても結構入っているほうだった。だが、この面々にこんな顔をさせるような噂など、心当たりは全くない。

「……ちょっと前、緒方さんとアキラと進藤君の三角関係ってのは聞いたけど。でもあれはデマだろう？」

突拍子もない話だったよねー、などと笑おうとした芦原は、しか

し三人の重苦しい沈黙に気圧された。

「…え？…そのことなの？」

冴木は首を横にふる。

「…じゃあ、やっぱり知らないんだな。そうだよな。知っていたら、そんなに平然としているはずもないしな」

でも、それと無関係でもないんだ。

ため息とともに言われ、芦原は一瞬このまま逃げ出そうかと考えた。唯一の逃走経路である玄関は既に鍵がかけられ、玄関脇の簡易キッチンには白川が陣取っている。

「単刀直入に言おう。今、噂されてるのは、塔矢アキラと進藤なんだ」

ああ。それでこの面子か。芦原は納得した。話の本筋からずれたところに思考を飛ばしていた芦原は、身構えができていなかった。

「その中でも一番ひどいのが、……塔矢アキラが、進藤に、…その、乱暴を働いたらしい、という噂だ」

……ランボウヲハタライタ？

三回ほどリピートして、ようやく音と意味が繋がった。

「アキラが？ 進藤くん？ ……ありえない！」

思わず叫ぶ芦原に、冴木も頷いた。

「ああ。わかってる。だから一番ひどいのが、と言っただろ。でもな、大筋では似た様なもんなんだ、全部」

憤る芦原に、冴木は状況を説明した。

今現在、棋院に流布している噂とは。

どうやら、進藤ヒカルと塔矢アキラはお互い少なからず想いあっていたらしい。

しかし、お互い奥手で、友人でライバル止まりだったらしい。

そこで、兄弟子で人生の先輩、しかも色事に関して百戦錬磨の緒方が、なにやらお膳立てをしてやっただけらしい。

だが、緒方のお節介が裏目に出て、初心な進藤ヒカルに対し、兄弟子からいろいろ吹き込まれた塔矢アキラがちょっとばかり行き過ぎた行為に出てしまった様だ。

結果、進藤ヒカルは塔矢アキラを変態と罵り逃げ回っている。

芦原は金魚のように口をパクパクさせた。何か言いたいのだが、何を言うべきか思いつかない。

「……いや、噂の本筋ってのはこんなもんでさ。しかも全部推測なんだが、ところどころ事実に近い所もあって……まあ、その行き過ぎ

た行為つてところには、いろんな尾ひれ付きまくりなんだけど」

「いや、でもさ。あのアキラに限って、そんなことが……」

「だから、これは噂の話でさ。……ただ、俺たちはちよつとばかり噂以上のことも知ってるんだ。それを考えると、あながち笑い飛ばしもできなくて……」

冴木が後ろで縮こまっている和谷を見た。

「……あの…、そのー……」

口ごもる和谷に代わって、伊角が前に出た。

「進藤のやつ、確かに、塔矢のそこを少なからず想ってはいたようなんです。ただ、多分あまり自覚はなかったと思うんですよね」

伊角は、ヒカルの『塔矢アキラに手を出させる宣言』の一部始終を話した。そして和谷が吹き込んだギャルゲーのくだりも。

芦原は初耳のことに目を見開いていたが、良く知っているアキラの性格と、多少は知っているヒカルの性格を考え、さもある、と納得した。

そしてパーティーのくだり。これは事務員の目撃談とパーティー会場に偶々居合わせた棋士からの話である。慎重に事実と憶測を見分け、事実のみを抽出した。

やはり緒方が何かお節介をしたのは間違いない。

そして、一週間前の、追いかけて。トドメに、ヒカルの変態発言。

「……どうだ。あながち噂と笑い飛ばせなくなってきただろう」

微妙に、顔の強張ってきた芦原に、冴木がたたみかけた。

「緒方くんは、あの人、実は結構世話焼きでしょ？ しかもちよつと人をからかうの好きだし。冗談交じりに塔矢くんをけしかけても不思議じゃないよね」

湯気もたたないほど冷めたお茶を盆にのせて、白川が会話に加わった。普段から穏やかに笑っている人だが、こんなときまで笑わないで欲しい。

「進藤くんもさ、恋愛事には免疫ないだろうし。塔矢くんも、世知に長けてるとは言いがたいでしょ？ まあタイミングが悪かったんだよね、きっと」

白川にまで駄目押しされた芦原は、完全に噂を信じた。

アキラが、進藤君に何かやってしまったのは間違いない。

「いや、まあそれで。こんな噂があるってもの、二人にとって良い

事じゃないし、なんとか丸く治めたいんだよ、俺たちは」

冴木の言葉に、芦原はガクガクと頷いた。

「あの二人が、喧嘩も無く普通に接してれば、周囲も馬鹿な噂なんか忘れると思うんだ。もともと、あの優等生の塔矢アキラが、つてんで信じてない人も多いし。だからさ、進藤の方は、俺たちでなだめるから、塔矢の方、なんとか説得してくれないか？」

二つ返事で飛び出してきた芦原は、その足で塔矢門下の研究会に飛び込んだのである。

一部始終を聞き終えた緒方とアキラは絶句していた。

確かに、事実の部分もある。が、その点と点を結ぶ線は憶測というより妄想の産物だ。

「……それとも、アキラくん。俺の知らないうちに進藤に何かしたのか？」

「……心外です、緒方さん。そもそも、進藤とまともに話したのはあのパーティーが最後です。以来何かと避けられて、その理由を問いただそうとしたのが一週間前ですが、そのときもまともに話もできずに逃げられました」

憮然とするアキラ。何故避けられるのか、聞きたいのは自分だ。

「……オレのモノ発言が気に障ったのか？」

緒方は呟き首を捻ったが、無自覚なアキラは呟きそのものをスル
ーした。

「……えー？　じゃあなんで？　ってか、じゃあどうしたらいいの
さ」

芦原は、その場の全員の思いを代弁した。

あかりの失敗

「さてと。あちらはこれで、まあ極端な行動はしないでしょうね」
にこりとわらった白川は、一同を見回した。

「じゃあ、こつちの話です。一体進藤君はどうしてしまったのしょうね」

「……その辺は、私が」

恐る恐る、といった風情で、桜野が控えめに挙手した。

「事の発端は、私も責任がありそうですし」

「そうですね。全くそのとおり。じゃあ進藤君のほうは責任を持って対処してくださいね。くれぐれも噂を助長させることがないように」

穏やかな口調なのに聞く者に冷や汗をかかせる、全く持って曲者な白川だ。

「で、男性陣は、何か聞かれたら、笑い飛ばしておきましょう。詳しい事情は言えないが塔矢君には同情する、とでも言うておけば、

まあ下世話な妄想も下火になるでしょう。ついでに、阿呆らしい噂を広める人物の顔はすっかり覚えておきましょうね」

否やは聞かない、とばかりに穏やかな笑顔で念を押す。冴木以下3名は条件反射でガクガクと頷いた。

白川は、実はかなり怒っているらしい。

実際、白川は進藤ヒカルを気に入っているし、高く評価している。くだらない噂に腹を立てるほどには、ヒカルに好意を抱いているのだ。もちろん、男女の情とは程遠いところでの話だが、だからこそヒカルを中傷しかねない噂は許せない。

件の下世話な噂を耳にしたときは呆れて二の句が継げなかったが、それが目の前で縮こまる弟子たちまで関わったとあれば、腹立たしいやら、嘆かわしいやら。和谷に泣き付かれた冴木に関しては完全に巻き添えなのだが、一蓮托生だ。

「それにしても、進藤君、何があっただけでしょうね。塔矢君が直接何かしたわけではないのは確実としても、まあ要因の一つではあるのでしょうか……。桜野さん、くれぐれも宜しく願いますね」

蛇ににらまれた一同は、失敗は許されないことを肝に銘じた。

一方、藤崎家のリビングで、あかりは頭を抱えていた。

ちよつとした意趣返しのもりだったのだ。散々振り回されたのだから、ちよつとくらい困らせてやろう、程度の軽い気持ちだったのだ。まさかあんなに効き目があるなんて、予想以上だった。

しかしよく考えれば、浅慮だったことは確かなのだ。もうちよつと深く考えていたら、少なくとも今の事態は避けられたはずで、後悔先に立たずとは正に今この時に使うべき言葉だと思う。

含蓄ある言葉も、この事態を收拾する役には立たないことが腹立たしいが、とにかく放っておくわけにはいかない。どうにかしなければ。でもいい知恵も浮かばない。結局頭を抱えるしかない堂堂巡りである。

「……………参つたなあ……………」

とにかく、ヒカルの思い込みをどうにかしなければ。

例のパーティーの後、ヒカルに襲撃されたあかりは、ちよつとしたイタズラを思いついたのだ。

ヒカルに、男の下心とか危険性とか、とにかくそういったものを強調したのだ。塔矢君だって例外じゃないのよ。オトコノコなんてケダモノなんだから。

実際、あかりだって詳しいわけではない。ただ女子高という特殊空間でちよつとばかり耳年増になっているだけだ。なので、つまり具体的には、AVを見せたのだ。いや、あかりだってはじめて見た訳で、かなり自爆な方法だったが。

夏休み最後のパジャマパーティで話が盛り上がった。ちょっと興味があるんだけど、という言い訳で、兄がいるクラスメイトから借りたソレは、確かに描写は直接的ではなかったのかもしれないが、シチュエーションがエグかった。

流行らしい、ご主人様とメイドもの

所詮行為のための行為なのだからストーリー云々以前の話なのだが、初心な少女二人には刺激が強すぎた。

しかし、ただ行為のグロテスクさに砂を吐くだけのあかりと違い、ヒカルはクリティカルにダメージを受けた。

『ご主人様』の男優は、エグゼクティブらしい振る舞いは、悲しいかな役者本人の品性が透けて見えたが、傲岸不遜で慇懃無礼な台詞回しだけはぎりぎり何とかなっていた。そして最悪だったのは一人称がボク、二人称がキミだったことだ。

つまりヒカルは、似ても似つかないAV男優にアキラを重ねてしまったのだ。

結果、ヒカルはあかりの予想以上にダメージを受け、アキラを必要以上に怖がってしまったのである。

「……まあね、塔矢君だって年頃のオトコノコなんだから、ちょっと位はエッチなところもあると思うのよ。少しくらいは、まあ普通よね。でもね。いくらなんでも、何にもしてないのにあんなあからさまに怯えられたら、どうしようもないと思うのよ。ってゆーか、もしかして塔矢君って、逃げられると追いかけるキャラだったりしな

い？それってちょっとこの場合最悪よね。火に油だわ。ヒカルつてば、余計怖がつて逃げ回るに決まってるじゃない。ますます泥沼だわ。うわ、やだやだ、もうそうなってる可能性もあるわ。なってないわけ無いじゃない、ヒカルと塔矢くんだもの！」

ぶつぶつ、頭を抱えては立ったり座ったり。あかりの母が見ていれば、悩みがあれば打ち明けて欲しい、と申し出るだろう拳動不審さだ。

「……………やっぱり、塔矢君に直接事情を話して、ごめんなさいするしかないかなあ……………」

ヒカルの思い込みはちょっとやそつとでは解決できないだろう。ダメージが大きすぎるのだ。

「……………嫌だけど、すっごい気が重いけど、でもちゃんとしなきゃね……………」

あかりはのろのろと外出の支度をはじめた。

それにしても、男性一般を怖がるのではなくアキラ単体だけ怖がるヒカルは笑ってしまうほど正直で、つまりまあ一目瞭然ということなのだ。これでどうして自覚が無いのか。

……………いつだって台風の下真ん中にいるのが、あかりの愛すべき幼馴染なのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137y/>

有言実行の男

2011年11月8日21時01分発行